

「先生、私はもう合格しました」
—— 中国大学生による不適切な「もう」の分析 ——

吉田 妙子

政治大学副教授

1. はじめに

学生の誤用の中には、誤りと言うよりも、使うべきではないところに使ってしまう「不適切」な使用も多い。それらは、純然たる統語上の誤用よりもかえって指摘しにくいものである。

(1) 先生、私はもう交流協会の留学生試験に合格しました。

これは毎年秋になると聞かれる報告であるが、これを聞くとどうしても、「何を生意気な」という気持ちになってしまうのだ。あるいは何か責められているような、情けない気持ちになってしまうのだ。

(2) 僕の本はもうなくしちゃったから、先生の本をちょっと貸してください。

これは、かつて同じ本を一緒に買った学生（かなり日本語レベルの高い学生）の言であるが、これを聞いて私は、そんなによく物をなくす人に大事な本を貸したくない、と思ったものだ。

(3) 私の母は、もう亡くなりました。

これは長患いの母親を亡くした学生からの訃報であるが、これを読んだ私は「この親不孝者！」とどなりたくなり、彼の母親の死を心から悼むとともに、彼の日本語能力をも悼んだ。

これらは皆無用の「もう」なのであるが、なぜ無用か、ということとは統語上の規則では説明できず、「もう」をめぐる時間認知のあり方、さらには「もう」の情意的意味の側面にまで踏み込んで検討しなければならないだろう。中国語の「已經」を「もう」と翻訳しただけでは「もう」の意味をわかったことにはならないのである。

2. 時間関係副詞としての「もう」と「まだ」

「もう」と「まだ」は対称的に使われると、一般には考えられている。

2-1. 森田の分析から

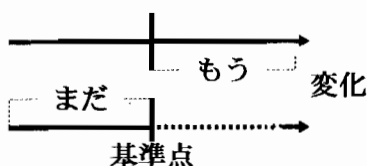
森田(1988)は、「もう」と「まだ」の用法には、ある基準となる時間軸がある、と捉えている。森田は、『事柄が、話し手の意識中の基準点を越えている場合に用いる』ことを「もう」の基本性質とし、「まだ」はそれに対応するものとして、下のような例を挙げて、下図のように説明する(注1)。

(4)宿題はもう終わった。／宿題はまだ終わらない。

(5)もうだめだ。／まだ大丈夫だ。

(6)もう3時だ。／まだ3時だ。

(7)ここにもう一つある。／ここにまだ一つある。



- * 基準点を越えてしまったら「もう」、越さないうちは「まだ」。
- * 基準点は主観的・流動的なもので、話者・判断・状況によって異なってくる。

しかし、この「主観的な基準点」がいかなるものか、森田の説明は今一つ不十分であると思われる。なぜならば、森田自身の挙げている例は、よく検討するとその「基準点」なるものの視点が同一でないからである。

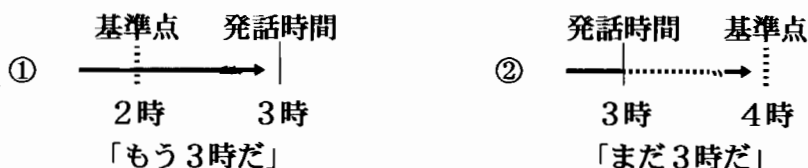
(4)の基準点は「宿題が終わる」という客観事実が実現する時点であるのだが、「宿題が終わる」ということを目標点と捉えた場合には、この時点は主観的に定められた基準点となる。宿題作業が完了した時に「もう終わった」になり、完了しない場合は「まだ終わらない」になる。

(5)の基準点は、話者が「だめ」だと感じるある主観的な限界点

があり、それを越した場合は「もうだめだ」になり、越さない場合は「まだ大丈夫だ」になる。この場合、基準点は全く主観的なものであり、客観的に観察できるものではない。

(4)(5)は客観性の度合に若干の差はあるが「もう」と「まだ」は同一の基準点を有し対称的な関係にあり、その基準点に達する場合は「もう」、達しない場合は「まだ」である。

ところが、(6)のように、同一の「3時だ」という事態に対する評価が違う場合はどうだろうか。これは、次の図式を以てしか説明することができない。



①は、たとえば2時に人と約束しているとする、3時という発話時間を確認して「もう3時だ」と言う。この場合は、2時が基準点になっている。

②は、たとえば4時に人と約束しているとする、3時という発話時間を確認して「まだ3時だ」と言う。この場合は、4時が基準点になっている。

どちらの場合も、話者の中の主観的な時間が基準点になっているが、両者の基準点は異なっている。

(7)の例は数量における一種のメタファー的用法であるが、この場合も同様で、「一つある」という同一の事態に対する評価の視点が異なっている。

このように、同一の事態に対して評価が違う場合の「もう」「まだ」の意識の基準点は同一ではなく、従って「もう」と「まだ」の関係は裏返しに対応する関係ではなくなる。

すなわち、森田(1988)の言う「主観的な基準点」とは、「同一の基準点を有して裏腹の事態を示す場合」と「同一の事態に対して

評価が違う場合」の2種類あることになってしまう。「基準点」の判断基準を明確に示してほしいところである。

管見では「もう」「まだ」には抽象的な「主観的基準点」なるものは一切なく、基準点の代わりに「参照時間」というものを想定すれば、この2種の「基準点」の問題も解決できるのである。

2-2. 「もう」「まだ」における「事件時間」と「参照時間」

一般的に時間副詞とされているものの中には「時間関係副詞」と呼ぶべきものがある。「1997年春」「某月某日」などは特定の時点を指定する、いわば「絶対時間副詞」とでも呼びたいようなものであるが、「きのう」「あした」「もうすぐ」などは、発話時間と関係したある別の時点を示す副詞である。

(8) きのう、おじさんが来た。

は、発話時間から見て前日に「おじさんが来た」ことを示し、

(9) もうすぐ春になるだろう。

は、発話時点から程ない時間に「春になる」ことを示す。(それ故「もうすぐ」と過去形が共起することはない。)これらの副詞は、文が話された「発話時間」(utterance time)と、事態が発生する「事件時間」(event time)との関係を指示するものである。

(10) やがて春になった。

「もうすぐ」が発話時間から程ない時間に事柄が発生することを示しているのに対し、「やがて」は別のある時間(春になる前のある時間)からほどない時間に事柄が発生することを示している。すなわち、「やがて」という副詞には「発話時間」と「事件時間」のほかにもう一つ、「事件時間」を相対化し位置づける「参照時間」(reference time)が考えられるのである。(ただし、「やがて春になるだろう」の文は、「発話時間」と「参照時間」が一致している例と考えられる。)

(11) 私が帰った時、妻はもう寝ていた。／私が帰った時、妻はまだ起きていた。

この例は「発話時間」、「事件時間」（妻が現実^に寝た時間）、「参照時間」（私が帰って妻が寝ている、或いは起きているのを発見した時間）の3種の時間を示している。つまり、妻の寝始めた時間（事件時間）に関して「○月○日○時に」という絶対時間の情報ではなく、「私が帰った時（参照時間）よりも早い／遅い時間に」という相対時間の情報を与えているのである。（「宿題はもう終わった／まだ終わらない」などの例は、「参照時間」と「発話時間」が一致している例と考えられる。）それ故、「もう」も「時間関係副詞」なのである。

2-3. 時間関係性から派生する「もう」「まだ」の性質の先取り
「もう」「まだ」には時間関係副詞としての性質があることがわかった。この性質は、さまざまな副次的な性質を派生する。

(12) もう 3時だ。／まだ 1時だ。

(13) もう 大阪だ。／まだ 名古屋だ。

(14) 授業はもう 終わった。／授業はまだ終わらない。

(15a) もう 一つしかない。／まだ 一つある。

(15b) もう 10人来た。／まだ 10人しか来ていない。

(16) 事ここに至ってはもう だめだ。／これならまだ 大丈夫だ。

まず、統語的に見れば文末で完了のタ形の使用が可能なのは「もう」の方の文だけであり、「まだ」の文には完了のテンスは用いられていない。「もう」は完了・状態どちらにも用いられるが、「まだ」は状態性の述語とのみ共起し得るのである（注2）。これについては、第3章で詳述する。

さらに、意味の面から見ると、「もう」「まだ」には時間関係から派生したメタファー的用法がある。(12)は二つの「時間」の直接的な比較、(13)は時間経過に伴って推移する「場所」の比較、(14)は時間経過に伴って推移する二つの「事態」の比較、(15a)(15b)はやはり時間経過に伴って推移する「数量」の比較（(15a)と(15b)では増減の方向が反対である）、(16)は時間推移と共起する「程度」

の比較である。「時間」を直接の比較対象として「場所」「事態」「数量」「程度」の用法へと移行している。これらは時間関係副詞「もう」のメタファー的用法と言わなければならない。これについては、第4章で詳述する。

3. 「もう」と「まだ」の対称性と非対称性

「もう」と「まだ」は、本当に対称的な用法がなされ得るのであろうか。意味の上では、「もう」と「まだ」が同一の「事件時間」を持つ場合は、セットで説明できる（すなわち「もう」と「まだ」のうち片方を説明すれば同時にもう片方も説明したことになる）であろう。しかし、統語上はどうであろうか。

(17) もう、ご飯を食べましたか。――いいえ、まだです。(○)

(18) もう、ご飯を食べましたか。――はい、もうです。(×)

なぜ、(17)は正しくて(18)は正しくないのか。

3-1. 副詞によるテンス・アスペクトの決定

ある種の時間副詞は断定のタを伴って述語になることができる。

(19) もう、充分食べました。→もう充分です。

(20) 彼はたびたび金を借りにくる。→彼が金を借りにくるのは、たびたびだ。

(21) もともと彼は頭がよかった。→彼が頭がいいのは、もともとだ。

(22) あいにく、雨が降っています。→雨が降っているのは、あいにくです。

(23) 夏休みは、すぐ来ます。→夏休みは、すぐです。

「充分」「たくさん」「少し」など量を表す副詞、「たびたび」「いつも」など頻度を表す副詞、「もともと」「さっぱり～ない」など事態のあり方を表す副詞、「あいにく」「せっかく」「もちろん」「案の定」「案外」「もちろん」「絶対」など事態に対する話者の陳述態度を表す情意副詞や陳述副詞、「きっと」「すぐ」「も

うすぐ」など事態の未完了状態を表す副詞（の一部）は、夕を伴って述語化することができる。これらは皆、一様に状態を修飾している副詞である。しかし、「やっと」「ついに」「ようやく」「とうとう」など完了した事態を表す副詞、「いっそう」「ますます」「さらに」など程度の移行段階を表す副詞は、述語として用いることができない。「もう」もこの種の副詞に属しているのである。

このことから、「もう」と「まだ」が対称的に捉えられないことが容易に理解される。すなわち、「まだ」は状態性の述語を修飾する副詞であるが、「もう」は状態性の述語を修飾するだけでなく、述語のテンス決定に参加することが予想される。この差はどこから出てくるのだろうか。

3-2. 「もう」「まだ」の時制表現における非対称性

非動作性の述語を持つ文には、「もう」「まだ」のどちらも用いられるが、動作性の述語を持つ文には「もう」しか用いられない。

- (24) もう食べました。 (動作完了)
 まだ食べていません。 (動作未完了)
- (25) もう食べます。 (動作開始の意志)
 まだ食べません。 (非動作状態継続の意志)
- (26) もう食べません。 (動作中止の意志)
 まだ食べます。 (動作継続の意志)
- (27) もう食べています。 (動作の開始完了・継続)
 まだ食べていません。 (動作未開始)
- (28) もう食べていません。 (動作の中止状態の継続)
 まだ食べています。 (動作の継続状態)

これらの例からわかるように、「まだ」が修飾する述語は動作の未完了ないし継続であり、一貫して状態性である。これに対し「もう」の方は、状態性の述語とともに動作の完了・開始・中止など、ある事態から別の事態への転換時点を修飾している。「もう」は完了時制を修飾することができるが、「まだ」はそれができず、修飾

できるのは状態性の述語のみである。

初級でよく見られる学生の誤用に、次のようなものがある。

(29) 「もうご飯を食べましたか。」

「いいえ、まだ食べませんでした。」 (X)

これは、タ形を過去のテンスと誤解していることからきている。

「もう食べた」のタ形は完了時制なのであり、それに対応する否定形は「まだ食べていない」なのである。(従って「食べていない」のテ形には完了の意味が入っている。)これに対し、「まだ食べません」という表現は「まだまだ食べるつもりはない」という未来に生じるべき事態についての意志表現(否定意志の表現)なのであるが、これは「もう食べます」(「もうすぐ食べるつもりだ」という未来の「参照事態」)の意志表現(肯定)に対応するものである。また「食べませんでした」は過去の一回限りの事実を述べる時に使うものであるから副詞「まだ」とは共起し得ない。つまり、

(30) 「もうご飯を食べましたか」

「いいえ、(忙しくて)まだ食べていません」

(31) 「もう、ご飯を食べますか」

「いいえ、(おなかがすいていないから)まだ食べません」

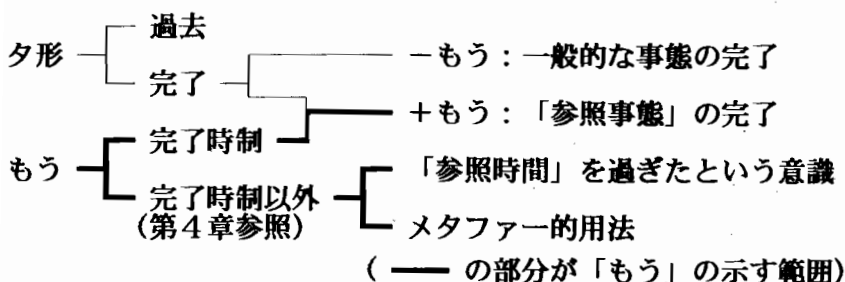
(32) 「昨夜、ご飯を食べましたか」

「いいえ、昨夜は(お腹が痛くて)食べませんでした」

という対応が正しいことになる。

日本語のタ形には「過去の一回限りの事態」を表す用法(「きのう、ハイキングに行きました」など)と、「事態の完了」(ある事態の結果が現在に影響を及ぼしている)を表す用法(「今、やっとわかった」など)がある。どちらであるか判定するのは文脈による場合もあるが、言語的には副詞によるところが大きい。過去の一時点を表す副詞があれば、それは「過去の一回限りの事態」と判定される(「きのう、ハイキングに行きました」など)が、「事態の完了」であると判定されるためには、現在の諸相を表す副詞が必要である(「今、やっとわかった」など)。このテンスを決定する副詞

の一つとして、「もう」の役割が位置づけられる。



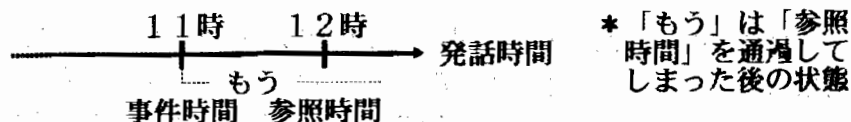
つまり、夕形に「もう」をつけたら完了になってしまい、過去の時制は表せないのである。「もう」は「まだ」と違って、完了時制を決定する機能を持っているのである。

時制表現においては、「もう」と「まだ」は対称的に捉えることができず、「まだ」から「もう」へと線状的に移行している。

3-3. 「まだ」と「もう」の「参照時間」の対称性

「まだ」を含む文は「予定される事態の未完了」の意識が見いだされるとしたら、「もう」を含む文は、この「予定された事態の完了」の時点から出発することになる。

森田 (1988) の「主観的な基準点」とは「参照されるべき事態」のことであったわけだから、森田の図式は下のように修正される。



例えば、妻が11時に寝た(事件時間)とする。私が10時に帰

ってきた場合は「私が帰った時は、妻はまだ寝ていなかった」と言い、私が12時に帰ってきた場合は「私が帰った時は、妻はもう寝ていた」と言う。

このように、ある「事件時間」を過ぎると、「事件時間」は「参照時間」の前方から後方へと動く。（あたかも、電車の窓から眺めている景色が前方から後方へと移っていくように。）それと対応して、「参照時間」は「事件時間」の後方から前方へと動く。

つまり、よく言われるような「もう」と「まだ」の対称性とは、抽象化された時間関係における対称性、いわばある事件を眺める視点の対称性であるのであって、何かある事柄の起こり方やあり方が対称的であるのではない。

さて、それでは、この「参照時間」を持つ「事件」とは、単なる事件とどのように違うのであろうか。

3-4. 「もう」のつく完了形とつかない完了形

「参照時間」にあたるものを、石神（1978）、赤羽根（1991）は「前提文」という表現を使って説明しているが、これは「もう」と「まだ」のテンス決定性の差を分析するのに役に立つので、暫時この説明を借りて考察を進めることにする。

赤羽根（1991）は「まだ」について次のように説明している（注3）。

〈近々Bになるだろう〉マダAテイル

〈近々Bになるだろう〉マダBテイナイ

（〈〉は、言語主体者に内在する前提文を表し、Aの事態の終了が、すなわちBの事態の始発である場合。）

「Bの事態」とは「事件時間」のことであるわけだが、「まだ」の用いられている文の中には「起こるべき事態の未完了」の意識が見いだされる。たとえば、11時半に昼食を食べるか食べないか聞かれた場合は、

(33)私は、まだ昼ご飯を食べません。早すぎますから。

と「まだ」を用いて答えるだろうが、ダイエットしている場合には

(34)私は、昼ご飯を食べません。ダイエットしていますから。

と、「まだ」を用いないで答えるであろう。(33)の場合には、「やがて昼ご飯を食べるべき時」という「前提文」(「事件時間」)があるが、(34)にはそれが無いからである。

しかし、「もう」の場合にはそのような前提文を作って解決するというわけにはいかない。赤羽根(1991)も「もう」については前提文を述べていないが、仮に「まだ」と対応した形で「もう」の前提文を考えてみると、次のようになる。

<少し前までAだった>モウBシタ/モウBシテイル

<少し前までAだった>モウAシテイナイ

(<>は、言語主体者に内在する前提文を表し、Aの事態の終了が、すなわちBの事態の始発である場合。)

けだし、この前提文は「もう」の性質を少しも解明したことになる。なぜならば、これでは単なる完了の文の性格規定とほとんど変わるところがないからである。

例 前提文<少し前までは冬だった>

モウ春ニナッタ (○) / 春ニナッタ (○)

つまり、「前提文」という概念を以てしては、ある文に「もう」という副詞をつける必然性が理解できなくなるのである。

けだし、このことは「まだ」と「もう」の時制における非対称性と、両者の時間関係における対称性ということとを併せ考えれば解決がつく。

「まだ」を用いる意識の中には、前方にある事態の実現(「事件時間」において発生する事件)が予定されている。つまり、その事態は「予定される事態」「起こるべくして起こる事態」である。そして、時間の線状性ということからすれば、「もう」の示す過去の

「事件」とは、「予定されていた事態」「起こるべくして起こった事態」なのである。例えば、「まだご飯を食べていません」と言う場合には「いつかはご飯を食べる」という意識が含まれているが、それが実現して「もうご飯を食べました」と言う場合は、「ご飯を食べること」は以前から予定されており、起こるべくして起こった事態だ、ということになる。

すなわち、「まだ」の前方に控えている「事件」がある「参照時間」から照射して予定される事態であるのに対し、「もう」の後方に控えている「事件」とは別の「参照時間」から照射された「予定されていた事態」なのである。普通の完了時制の表す事態は偶発的に生じた事態かもしれないが、「もう」のつく完了時制の表す事態は「予定された事態」なのである。

かくして「もう」の扱う事態には「予定性」が入りこむことになり、「まだ」の使用には見られない情意性をも帯びてくることになるのである。

4. 「もう」の使用の諸相

「もう」と「まだ」には「参照時間」があり、それが「事件」の捉えられ方を決定するのであった。そして、「もう」の扱う事態は「参照時間」から照射すると「予定された事態」であった。本章では、本稿のテーマである「もう」に限って、「事態の予定性」という観点からその用法の諸相を見ていき、それが「もう」の醸し出すある情意性につながっていくことを見る。

4-1. 「参照時間」の移動による「予定性」の発生

たとえば、裁判所で裁判官に尋問された証人の答を考えてみる。

(35)「証人は、○月×日の△時頃、被害者○○○の家に行きましたか。」

「はい、行きました。」(○)

(35')「証人は、○月×日の△時頃、被害者○○○の家に行きま

したか。」

「はい、もう行きました。」(×)

上の(35')がおかしいのは、「○月×日の△時頃、被害者○○○の家に行く」という事態はあくまで偶発的なもので、予定されていたものではなかったためである。これに対して、次の場合には「もう」が使える。

(36)「証人は、○月×日の△時頃、被害者○○○の家に行きましたか。」

「はい、行きました。しかし、私が○○○の家に行った時は○○○はもう殺されていました。」(○)

これは、「○○○が殺された」という事態が既定のことで、当事者たちの意識の中で予定されている事実だからである。その際、話者の「参照時間」は「○○○の家に行った時」という過去の時点へと移動しており（「彼は、もう死んでいる。」と言う場合は「参照時間」は「発話時間」と等しい）、それに従って「事件時間」はさらに前の時点へと移動していることになる。これは、過去の事実を想起する時などに使われる「もう」の意識（英語の文法では「大過去」などと呼ばれている）で、「参照時間」が「発話時間」から過去へとずれている例である。

4-2. 「予定性」を生じる事態と生じない事態

冒頭に挙げた誤用例、

(1)先生、私はもう交流協会の留学生試験に合格しました。
の文を聞いて奇異に感じられるのは、学生が留学生試験に合格するのは予定されたことではなかったからである。

しかし、司法試験、医師・教員などの国家試験、運転免許試験、日本語能力試験など定期的に行なわれる試験の場合は、何回かチャレンジすれば合格するだろうという「予定性」が発生する。そこで(37)もう運転免許の試験には合格したけれど、お金がないので車を買うことができない。

などと言うことができることになる。また、合格の時期に幅があると、人によって早期に合格する人と何回受けても失敗する人がいるので、

(38)私は日本語能力試験にもう合格したけれど、彼はまだです。などとも言うことができる。このように、同じ事態でも事態の実現に時間的な幅がある場合は、「予定性」が発生するのである。

さらに、次のような場合もある。

(2)僕の本はもうなくしちゃったから、先生の本をちょっと貸してください。

この文が変なのは、まるで本をなくすことが予定されていたことであるかのようなので、この学生がなくし物の常習犯であるような印象を受けるからである。しかし、子供などでよく物をなくす癖のある人の場合は、

(39)この間買ったばかりの本をもうなくしてしまった。などと言えるのである。個人の習慣・癖といった個別的な事情からも「予定性」は発生する。

このように、普通の完了の文と「もう」を使った完了の文の違いも、まさに「事件時間」が「参照時間」から照射されているか否かの違いなのである。その予定性とは、「もう春になった」「もう3時だ」などのように自然時間や自然の摂理によって決められる場合もあるし、「もうご飯を食べた」「もう卒業した」など社会の慣習や常識によって決定されることもあるし、また、「彼はもう来た」「私はもう大丈夫だ」といったように全く個別的な事情や判断によるものまで、さまざまなのである。

4-3. 話者間における時間認知のずれの調整

冒頭の誤用例で、母親の訃報を伝える時に、

(3)私の母は、もう亡くなりました。

と言った学生が親不孝に感じられたのは、「もう」の「事態の予定性」により、まるで親が死ぬのを予定し期待していたかのような印

象を受けるからである。それでは、この文が正しい文として機能するのは、どのような時であろうか。次のような状況が考えられる。

(40) A「お母様は、今年おいくつになられましたっけ。」

B「え？ 母はもう亡くなりましたが・・・」

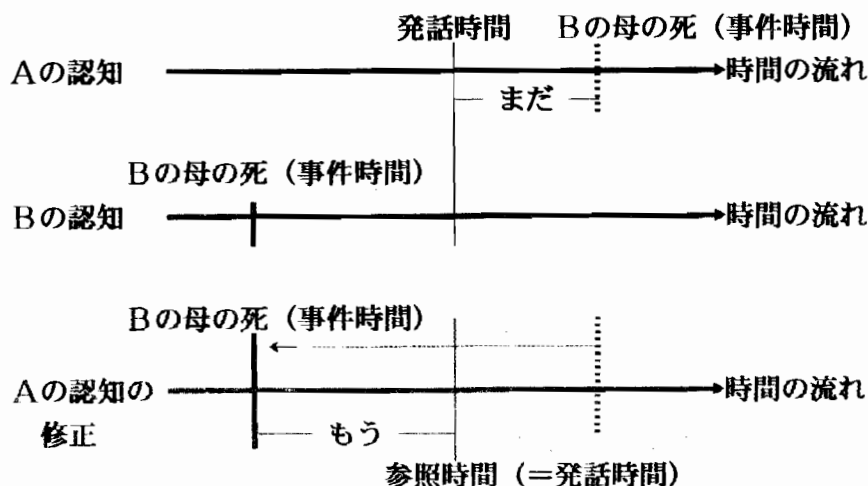
Bの頭の中では母親が亡くなったことが既定のこととして意識されているのに対し、Aの頭の中では未定のこととして意識されている。たとえば、次のような会話の中では、Bは「もう」を使わないはずである。

(40') A「(Bの母の臨終の場にかけて) お母様は・・・」

B「・・・母は亡くなりました。」

この場合、Aの頭の中ではすでにBの母親の死は予測されていたはずであるのに、「もう」を使わない。

(40)ではAの意識とBの意識において、Bの母親が現実に死んだ「事件時間」が一致していないが、(40')では一致している。それ故、(40)の「もう」のは、二者の認識における「事件時間」の認知のずれを調整するために用いられている、とすることができる。メンタルスペース理論を借りてこれを図示すれば下のようなになる(注4)。



Aの認知においては、「Bの母はまだ死んでいない」、つまりBの母の死は「発話時間」より前方の「事件時間」にある。

これに対してBの認知においては、「某年某月某日、母親が死んだ」、つまり母の死は「発話時間」より後方の「事件時間」における、偶発的な（予定性を持たない）事態である。

Bは、この時間認知のずれを修正しなくてはならない。これを修正するためには、Aにおける「事件事態」を発話時点より後方にずらさなくてはならない。

ところで、「発話時間」より後方の「事件時間」に起こった事態を表すには完了形が用いられるから、Bは単なる完了形を用いて、「母は亡くなりましたが・・・」と言うこともできる。しかし、Bの認知において、Aの「発話時間」は「参照時間」である。（つまりBは「Aは私の母がまだ死んでいないと思っている。Aの認識は遅れている。」と感じている。）そこで、Bの認知の中で、Aの「事件時間」を「発話時間」より後方に引き戻し、しかもその「発話時間」を「参照時間」と位置づけなおす、という操作が行なわれる。

（「発話時間」を「参照時間」と位置づけることによって、BはAに妥協しているわけであるが。）

このように修正された時間関係を持つ「事件」は、「もう」によって表される事態である。

かくして、Aの誤った時間認知を正しい時間認知へと修正するため、「母はもう亡くなりましたが・・・」という発話が可能になる。

この時点で「発話時間」は同時に「参照時間」になるため、「もう」は「事態はあなたが考えている時よりも以前にすでに完了していた」という意味合いを持ち、それ故、使い方によっては相手の認識の遅れを指摘する情意性を帯びてくるのである。

冒頭の文、

(1)先生、私はもう交流協会の留学生試験に合格しました。
という言葉を見ると、何かこちらの認識の遅れを修正されているよ

うな、責められているような気になってしまうのも、ここに由来する。この例の「もう」の用法が妥当である状況を考えてみよう。

(1') 教師「君はこの頃、さっぱり勉強しないね。」

学生「先生、私はもう交流協会の留学生試験に合格したんですよ！」

これは、学生が教師の状況把握に不満を呈している場面である。学生は、自分の「合格」という事態に対して教師の時間的位置づけが遅れている（「勉強すべし」という認識は「合格」以前のものである）と感じ、それをとりたてるために試験の合格という「事件時間」に「もう」を付して教師に抗議しているのである。

「もう」は時に「驚き」の情意をも表わすことがある。(1')には「合格した」という事態を相対化する「参照事態」がある（「勉強しなければならない」）から自然な会話となっているが、(1)には参照すべき事態がないから、奇異に感じられるのである。

(41) 娘「お父さんは？」

母「寝てるわよ。」

娘「えっ、まだこんな時間なのに、もう寝ちゃったの！」

これは、「娘」の「父の就寝の時点」についての誤った「参照時間」の認知を、「娘」自身が自己修正するための「もう」である。

これらの「もう」は、会話において相手と自分のメンタルスペースにおける時間認知のずれを調整する言語装置として機能していると言える。

それ故、「もう」は「予定性」の性質により、「時間関係副詞」から「情意副詞」へと一歩近づいていると言うことができる。

4-4. 時間領域から数量領域・程度領域へのメタファー

上記(12)～(16)の例のうち、

(12) もう 3時だ。 / まだ 1時だ。

は、「事件時間」が自然時間であるので計量可能であり、「まだ」から「もう」への時間上の線状的移行性が最もわかりやすい。

(13)もう大阪だ。／まだ名古屋だ。

(14)授業はもう終わった。／授業はまだ終わらない。

は、自然時間がテーマではないが、自然時間と共起する事態の推移が述べられているので、やはり「まだ」から「もう」への時間上の線状的移行性が維持されている。しかし、

(15a)もう一つしかない。／まだ一つある。

(15b)もう10人来た。／まだ10人しか来ていない。

(16)事ここに至ってはもうだめだ。／これならまだ大丈夫だ。

などの例は、時間の移行の問題では全くなく、視点の問題である。

「もう10人来た」は、現状の数量が不十分だという意識のもとで発話されたものである。数量が「予定された数量」を過ぎて、さらに量が増えていくという意識である。一方、「まだ10人しか来ない」は、現状の数量が充分だという意識のもとで発話されたものであり、数量が「予定された数量」に達していない、という意識である。これは、「もう」「まだ」の用法の数量領域へのメタファーとすることができる。

さらに、森田(1988)は、「まだ」だけに特殊な意識として、

(42)私も悪いが、彼の方がまだ悪い。

(43)あんな学校に行くくらいなら、浪人した方がまだいい。

などの用法を挙げている。これについて森田は、「AよりもBの方がまだX」という場合、どちらも基準点に達していないが、Bの方がより基準点に近いという意識を表す、と言っている(注5)。しかし、「まだ」は本来基準点からの遠近を論じる用法ではない。

この「まだ」の用法は、「参照時間」のアナロジーである「参照事態」という概念を用いれば簡単に説明できる。(42)は、「彼」を「悪さ」の「参照事態」とし、「私」を実現すべき「よさ」の事態と捉え、彼がその「よさ」に達していない、ということである。また、(43)は、「浪人すること」を「好ましくない事態」の「参照事態」とし、「あんな学校に行くこと」を実現すべからざる「最悪の事態」と捉え、「浪人すること」は「最悪の事態」のレベルに達し

ていない、と言っているだけのことである。ここにも、目に見えない「主観的な基準点」なるものは存在しないのである。

ちなみに、(42)をパラフレイズして、

(42')私も悪いが、彼に比べたらまだましだ。

とした場合は、評価の視点の逆転に伴って「参照事態」も逆転し、「私」が「悪さ」の「参照事態」になる。程度領域においては時間関係が捨象されているから、「事件時間」と「参照時間」との前後関係はなく、ただ「事態」と「参考事態」の相対的な評価関係だけが抽象されて残っているのである。それ故、この種の「まだ」は、「参照時間」ではなく「参照事態」に達していないという意識を表す、「まだ」のメタファー的用法である。

これに対応する「もう」の用法はない、と森田は言う(注6)。しかし、上の例を「まだ」の程度領域へのメタファーと捉えるならば、同じく程度領域を示す「もう」の用法は容易に発見される。

(44)これからは、もう煙草を吸わない。

(45)もう食べられない。

などは、限界時間(「事件時間」)が過ぎたことの表明でもあろうが、「もうこれ以上吸わない」「もうこれ以上食べられない」という数量(時間と共起し得る)へのメタファーでもある。また、主に会話中に観察される特殊な用法として

(46)この子は、ほんともうしょうがない。

(47)一流大学に合格したんで、もう、うれしくてうれしくて。

などという例がある。これは間投詞に近い用法と言えるが、「限度(「事件時間」)」を越えていることに対する驚き・感慨といった感情を表すものであり、「もう」が程度領域に移行していることを示す例であろう。さらにまた、程度領域における「もう」が情意性を帯びている「もう」として最も適切な例であることは、言うまでもない。

5. 中国人学生における「もう」の多用現象の根源

以上で、「もう」の「時間関係副詞」としての性格、テンス決定性、及びそこから派生する情意性を明らかにした。では、中国人学生による「もう」の多用現象はどこから生じてくるのであろうか。また、また、不適切な「もう」の使用は何故日本人に奇異な感情を引き起こすのであろうか。それは、日本語と中国語における、時間認知についての言語形式の差からくることが予想される。また、日本人の時間認知と言語形式の対応が、ある情意性を呼び起こす原因になっていると考えられる。

5-1. 時制を決定する言語形式

中国人学生は、特に「発話時間」と「参照時間」が一致している場合に、不要の「もう」を使う傾向があるようである。ここでは、言語形式の比較から「もう」の多用現象の根源を考える。

5-1-1. 日本語の「もう」「まだ」に対応する中国語の表現

多くの教科書では「もう」「まだ」に「已經」「還」の訳語があげられているが、両者の使用領域はややずれているようである。試みに、例文(12)～(16)に中国語訳をあててみると、まず「事態の完了・未完了」を表す「もう」「まだ」には「已經」「還」がほぼ該当するようである。

(14) 授業はもう終わった。／授業はまだ終わらない。

(14C) 已經下課了。／還沒下課。

(16) 事ここに至ってはもうだめだ。／これならまだ大丈夫だ。

(16C) 事到如今、已經不行了。／這樣的話、還可以。

従って、時制を過去に平行移動した時の用い方も可能である。

(36) 「私が〇〇〇の家に行った時は、〇〇〇はもう殺されてしまった。」

(36C) 我去的時候〇〇〇已經就被殺死了。

しかし、次の例では「已經」と「還」の対応はくずれてくる。

(12) もう3時だ。／まだ1時だ。

(12C) 已經三點了。／才一點。

(13) もう大阪だ。／まだ名古屋だ。

(13C) 已經到了大阪。／才到名古屋。

(15a) もう一つしかない。／まだ一つある。

(15aC) 現在只有一個而已。／還有一個。

(15b) もう10人来た。／まだ10人しか来ていない。

(15bC) 已經来了十個人。／才来了十個人。

すなわち、述語が事態の完了・推移を示す場合には「已經」が使われるが、(15aC)のように述語が状態性を表す場合には使えない。また、「還」は述語が事態の未完了および状態性を示す時には使えるが、(12C) (13C) (15aC)のように事態の遅れの意識を表す場合には「才」が用いられる。

さらに、「未来の事態の予測」の場合を見てみよう。

(48) 彼は、もう来るだろう。／彼はまだ来ないだろう。

(48C) 他應該快来了吧。／他還不會来吧。

(49) 店を閉めよう。客はもう来ないだろう。／店を閉めるのは早い。客は、まだ来るだろう。

(49C) 打烊吧！ 客人不會再上門来了。／關門太早。客人還會上門的。

(50) 彼は、もう来ないだろう。

(50C) 他不會来了吧。

未来のことはあくまで予想であり、状態性であるので、述語修飾には「還」が用いられる。しかし、日本語で「もう」を用いる未来の否定文（「もう～ないだろう」）には「再」が用いられる。例文(49) (50)の「もう」は時間と共に起る可能的事態が発生する「事件時間」を越えたことの実現であるが、その場合には「已經」は用いられない。しかし、次の例に関しては、中国語話者の間でも異論があるようである。

(51) 10月なんだから、もう暑くなることはないだろう。

(51C) 都10月了、已經不會再熱了吧。（?）

以上のことから、次のことを結論してもよいだろう。

中国語の「已經」は、述語が事態の完了を示す時にのみ用いられる。日本語のように、時間性を捨象した状態性（数量・可能性などの推移）の場合には用いられない。それ故、上記(15aC) (48C) (50C)などの文も、完了事態を示す表現が伴えばそれに「已經」がついて「もう」の意味を表すことができるのである。

(15a') 全部使ってしまって、もう一つしかない。

(15aC') 已經全部被用光了、現在一個而已。

(48') 3時だ。彼はもう来るだろう。

(48C') 已經3點了。他應該快来了吧。

(50') こんなに遅くなつては、彼は、もう来ないだろう。

(50C') 已經這麼晚、他不會来了吧。

従って、「已經」にはメタファー的用法も見られない。例えば、例文(46)のメタファーを翻訳すれば次のようになる。

(46) この子は、ほんとにもうしょうがない。

(46C) 這小孩、已經無可救藥了。

これは「已經」を間投詞的に用いているというより、全体の意味を事態の完了・推移のあり方を残した形での翻訳（或いは、全体の意味を程度領域から時間領域に還元した形での翻訳）である。

また「話者間における時間認知のずれの調整」の用法としては、「已經」のほかに「早就」（早くも）という言い方が用いられるようだ。

(40) A 「お母様は、今年おいくつになられましたっけ。」

B 「え？ 母はもう亡くなりましたが・・・」

(40C) A 「你母親今年幾歲呢？」

B 「咦？ 我母親早就過世了。」

(41) 娘 「お父さんは？」

母 「寝てるわよ。」

娘 「えっ、まだこんな時間なのに、もう寝ちゃったの！」

(41C) 女兒 「爸爸呢？」

母親「在睡覺。」

女兒「咦！這麼早就睡啦！」

(52) もう帰るの？ もっとゆっくりしていらっしやいな。

(52C) 你這麼早就要走啦！ 再多待一下嘛。

但し、(52c)の場合、「這麼早就」の代わりに「已經」を用いて「你已經要走嗎？」とすると、「もう帰ることにしたの？」と言う行為者の決意の面を問題にする場合に使われると言う。

一方、「還」と「まだ」の関係は、どちらも状態性（事態の未完了状態・継続状態）を表すものに用いられるので「已經」の「もう」に対する関係よりも対応度が広く、程度領域へのメタファーの用法も存在する。

(42) 私も悪いが、彼の方がまだ悪い。

(42C) 我也壞，但他還壞。

しかし、前述の例文「まだ1時だ」「まだ名古屋だ」「まだ10人しか来ていない」などでは「才」が用いられる。述語がある到達点を示し、それが予定状態から遅れていることを表す時には、「状態性」とも「事態の未完了」とも考えられないようである。これは事態が予定より早く生じた場合に「早就」が使われるのに対応している。

以上、日本語の「もう」「まだ」と中国語の「已經」「還」の対応範囲を考察してきたが、この中で中国語の「已經」が事態の完了・推移を表す述語とともに初めて用いられることは、日本語の「もう」と比べてマークすべきことであると思われる。

5-1-2. 「もう」と「已經」の時制決定性

周知のように中国語は孤立語と言われ、動詞はテンスの変化をしない。日本語の現代語では、過去と完了はどちらもタ形を用い、その区別は主に副詞や文脈などによって示される。ある文のタ形が過去を示しているか完了を示しているかは、日本人自身も平常は弁別していないことが多く（それ故、日本人にとって初級英語の学習で

は現在完了および過去完了は特に学びにくいものになっている)、ましてや中国人にとって夕形の習得はもっと困難であろう。事実、夕形を「過去形」とのみ捉えていて、完了の用法を理解していない学生も多いのである。

さらに第3章ですでに述べたように、述語が夕形の文に「もう」がつくと完了の文になるが、「もう」のつく文でも完了時制を持たないものもあるし、また「もう」のつかない完了の文もあるので、「もう」は完了の標識にはならない。

これに対して、中国語の「已經」は、前節で見たように必ず事態の完了・推移を示す場合のみ使われる。すなわち、「已經」は完了の標識なのである。そこで学生は夕形の述語を持つ文に「もう」を付して、さらに標識化しようとする。あたかも「もう～～た」という文型のごとく覚えている学生もいるようである。現在完了形は「発話時間」と「事件時間」しかないが、「もう」の現在完了形では「発話時間」と「参照時間」が一致している。「発話時間」に隠れて「参照時間」が見えなくなっている現在完了形の時制を用いる時、普通の完了形と混同して「已經」にあたる「もう」を使ってしまいやすいのであろう。

次の(53C)は最近たまたま耳にした例であるが、休み時間に教科書を持って近寄って来た学生と私との会話である。

(53C) 学生「(教科書を開いて) 老師、我有一個問題。」

老師「(学生の教科書を覗き込みながら) 第幾頁呢?」

学生「(質問箇所を指さして) 這裏啊, 已經唸過的地方。」

(53) 学生「先生、一つ質問があります。」

教師「何ページですか。」

学生「ここです。もう読んだ所です。」(?)

この場合、「已經」に「もう」という訳をあてると、今一つそぐわない感じがする。私は特定のページを「予定」していたわけではなかったし、時間認知のずれを訂正する必要もなかったからだ。学生は「已經」によって単に完了を示したに違いなく、「前に読んだ

所」とか「さっき読んだ所」とかの意味で言ったのであろう。「参照時間」を持たないふつうの完了形一般には、「もう」でなく「すでに」を用いるべきであろう(注7)。(53)の会話も「もう」でなく「すでに」を用いると、座りがよくなる。

中国語の「已經」は、「もう」のつくべき完了も、「もう」のつかない完了一般も、ともに包含している語なのである。ここから、学生が完了を示す副詞として「已經」を安易に使ってしまうであろうことは、想像に難くない。例文(1)の「先生、私はもう合格しました」も、中国語の「老師、我已經考上了」をそのまま直訳したものと考えられる。この場合の「已經」は、単に事態が過去に起きたことを示す「時間副詞」になっている。すなわち「もう」があくまで「時間関係副詞」であるのに対し、「已經」は「時間関係副詞」としても、またあるいは「時間副詞」としても用いられることができると言える。

同時に、これは比較的初級の学生に見られるミスであるが、

(54)「病気はどうですか。」

「今治ります。」(「もう治りました」の誤用)

のように、「もう」を使わない誤用も理解できる。初級の学生は動詞の原形を有標のものとして使ってしまう傾向がある上に、完了形としてのタ形に未習熟なまま完了の事態を表現しようとするなら、「今」という副詞によって過去の時点からの訣別を表現するしかないからである。

ただし、例文(3)の不要の「もう」の中国語訳に関しては、「已經」を用いてもおかしいようである。

(3)私の母は、もう亡くなりました。(×)

(3')我母親已經過世了。(×)

(3')の文の正否を何人かの中国人に聞いた結果、「正しい」という人もかなりいたが、この結果については「若い人の中国語の乱れだ」という説があった。確かに、母国語で正しくない言い方を外国語にそのまま適用するとは普通はまず考えられないから、「もう亡

くなりました」という日本語を話す人は中国語でも「已經過世了」
という言い方をしているに違いない。とすれば、これはやはり中国
人自身の中国語の使い方そのものに問題があるのではないかと思わ
れる。

5-2. 時間関係性と情意性

中国語の「已經」は状態性の述語にはつきにくい。これに対して
日本語の「もう」は、状態性の述語にもつくことができる。この理
由は、時間領域から数量領域・程度領域への移行の過程で観察でき
る。時間領域から数量領域あるいは程度領域への移行としては、次
のような例が考えられる。

(55)客は、まだ来ないだろう。／客は、もう来るだろう。

(56)まだ暑くならないでしょう。／もう暑くなるでしょう。

この分析については、森田(1988)が充分説明していると思われる
が(注8)、「客はもうすぐ来る」「まだまだ来ない」「もうす
ぐ暑くなる」「まだまだ暑くならない」というように、どちらも時
間領域の用法(或いは時間と共起する可能性を示す用法)である。
しかし、

(55')客は、まだ来るだろう。／客は、もう来ないだろう。

(56')まだ暑くなるでしょう。／もう暑くならないでしょう。

の用法は、時間領域のものとは言えない。(55')の「客はまだ来る
だろう」は、「客はまだまだ来るだろう」と客の数のこと(数量領
域)を言っていると思われる。しかし「客はもう来ないだろう」の
方は「こんなに遅くなつては、客はもう来ないだろう」と時間を表
す場合と、「すでに客はたくさん来た。もうこれ以上たくさんは来
ないだろう」と数量を表す場合が考えられる。また、(56')の「ま
だ暑くなるでしょう」は「まだまだ暑くなるでしょう」と、暑さの
程度のこと(数量領域ないしは程度領域)を言っているが、それ
に対して「もう暑くならないでしょう」の方は「こんな時期になつて
は、もう暑くならないでしょう」と時間を表す場合と、「すでに暑

さのピークは過ぎた。もうこれ以上暑くならないでしょう」と数量ないしは程度を表す場合が考えられる。このような「もう」の用法は、時間領域から数量領域ないしは程度領域への移行段階（注9）にある用法だと言えるだろう。数量領域において「まだ」から「もう」への時間的線状性は捨象され、程度領域においては「もう」と「まだ」は時間関係性だけが抽象されたメタファー的用法になるのである。だから、これらのメタファー的用法は完了時制を持ち得ない。

ところで、前節で述べたように、中国語では事態の推移を表す文にしか「已經」は付けられない。

(50) 彼はもう来ないだろう。

(50C) 他不會来了吧。

(57) もう、食べたくない。

(57C) 我不想再吃。

(58) もう起きてよ。

(58C) 起床吧。

しかし、前述のように中国語や英語では事態が推移した「事件時間」の標識が前に示されていれば、その文に「已經」や 'already' をつけることができる。

(50') こんなに遅くなつては、彼はもう来ないだろう。

(50C') 已經這麼晚、他不會来了吧。。

(50E') It's already this late, and he probably won't come.

(57') たくさん食べたから、もう食べたくない。

(57C') 已經吃了很多、我不想再吃。

(57E') I've already eaten so much, and I won't eat any more.

(58') 8時なんだから、もう起きてよ。

(58C') 已經8點了。起床吧。

(58E') It's already eight o'clock. Get up!

つまり、中国語・英語と違って日本語では述語がダロウ、タイ、依頼などのモダリティを持つものでも「もう」で修飾できるのであ

る。

ところが、このモダリティをも修飾できる「もう」の性格は、用法によっては文の情報内容の理解にも大きな影響を持っている。

(59)私は、結婚したくない。

(60)私は、もう結婚したくない。

最初の(59)の文が単に欲求状態を述べているのに対して、(60)は「一度結婚してこりごりしたから二度としたくない」という情報が読み取れる。あるいは、「以前は結婚しいと思ったが、その後結婚の意欲がだんだん薄れてきて、ある時点を越したらまったくその気がなくなってしまった」という、欲望の程度の領域としても読み取れる。中国語に訳すとした、前者の読みなら、

(60C)我以后不想再結婚。

であるが、後者の読みなら、

(60C')我現在不想結婚。

と、別の副詞を用いるところである。つまり、中国語の「已經」よりも日本語の「もう」の方が、情報量が多いのである。

モダリティを修飾できる「もう」が情意性を表す機能を持つであろうことは、想像に難くない。形容詞を修飾する場合には、

(61)ああ、もう、いやだ。

(62)もう、うれしくてうれしくて。

など、単に「限度を越えた」という感慨の情意を表すようになり、さらには、

(63)あなたという人は、ほんとに、もう！

など、間投詞のように使われるのである。(英語の'already'に情意的な意味を持たせようとするなら、それはおそらく語用論の範疇で論じられることになるであろう。)

かくして、「もう」は状態性の述語を修飾する時、情意副詞に転ずることがあるのである。

そして、このような情意性を持ちやすい「もう」が完了時制を示す述語のある文において乱用される(不要に用いられる)時、それ

は言表された「事件時間」が「予定の時点を越えている」という意味合いになる。つまり「話者間の時間認知のずれ」の訂正として用いられたことになる。こうして、不要の「もう」は聞き手の時間認知の遅れを叱責されているという情意を呼び起こすことになるのである。

中国語の「已經」は情意を示す状態性述語にはつかず、ましてや情意副詞とはなり得ない。従って、「もう」の呼び起こす情意性に無頓着であることが考えられる。このことも、中国人学生による不適切な「もう」の発生の遠因になっているだろう。

6. 終わりに

6-1. 時間認知と言語形式

日本語の「もう」と「まだ」に対応する英語の副詞には *already* と *yet* がある。*already* は「事態の完了」(もう~した)を表し、*not yet* は「事態の未完了」(まだ~していない)を表す。しかし、日本語で「もう」「まだ」と訳される英語の副詞には事態の継続性(状態性)を示す *still* (まだ~している)と *not ~ any more* (もう~ない)があり、*already* や *yet* と厳密に区別されている(注10)。

(64) I've already stopped smoking. — もう煙草をやめた。

(今煙草を吸っていない・喫煙行為の完了)

(64') I'm not smoking any more. — もう煙草を吸っていない。

(今煙草を吸っていない・禁煙行為の継続)

(65) We haven't eaten yet. — 我々はまだ食事をしていない。

(もうすぐ食事をする・食事行為の未完了)

(65') We still haven't eaten. — 我々はまだ食事をしない。

(まだ当分食事をしない・拒食行為の継続)

すなわち、*already* と *yet* は、完了・未完了の標識になる(注11)。のみならず、英語では完了事態と継続事態、さらに完了事態

における完了・未完了、継続事態における過去からの継続と未来への継続の標識は、副詞によって区別されなければならない。また、過去時制で用いられる時間副詞 ago は完了時制では使えず、完了時制においては before という時間関係副詞がもっぱら用いられるなど（注12）、言語形式は明確である。このように時間認知のあり方が言語形式によってはっきり区別されているので、これらの副詞はメタファー的な用法へとずれることがなく、また情意性を帯びることも少ないようだ（注13）。

以上のことから、英語においては、副詞による時間の区切りが非常に明確であることがわかる。

これに対して、中国語の「時間の区切り」はどうか、

時間の区切りに関して中国人学習者がきわめて頻繁に起こす誤用には、次のような代表的な例がある。

(66) 父は昼間ずっと仕事をして、午後5時まで退社します。

この文は中国語では、

(66C) 我父親白天都在上班一直到下午5點才下班回家。

とうので、この誤用は明らかに母語干渉が原因と言える。「下午5點」は仕事の終わりの時点でもあり、また退社の時点でもあるわけだが、中国語ではこの時点が2つの行為の転換点として捉えられている。学生は中国語の「到」を日本語の「まで」と直訳し、上記のような誤用が出てくるというわけだ。しかし、我々日本人の感覚からすると、中国語文の「下午5點」は「上班」を修飾するのか「下班回家」を修飾するのか構文上の位置づけがはっきりしないので、午後5時という時間は仕事が終わった時間なのか退社する時間なのか曖昧になる。上記の中国語文を日本語に直訳するとしたら、

(66') 父は昼間は午後5時までずっと仕事をして、午後5時に退社します。

と、「午後5時」を2度使い、それぞれ「仕事をする」と「退社する」の2つの動詞に振り分ける必要がある。何故かといえば、「仕事をする」は継続性のある動作だから副詞句には「空間・時間の終

点」を示す助詞「まで」を付し、「退社する」は瞬間的な動作だから副詞句には「時点」を示す助詞「に」を付さなければならないからである。日本語では時間についての認知領域が異なる動作には、異なる副詞句を用いなければならない。時間について同一の認知領域を持つ2つの動作において初めて、同じ副詞句で2つの動作を修飾することができるのである。

(67) 父は午後5時に仕事を終わって、退社します。

時間の区切りと言語形式との対応に関して見る限り、英語は構文的にも語彙的にも非常にシステムティックに言語形式が対応しており、副詞も時間のシステムに従って配列されている。比較的「一対一対応的」な言語と言えよう。

しかし、中国語の場合は、時間の区切りが構文的に枠づけられているわけではなく、テンスの判定は主に文脈によることが多い。時間を示す言語形式としては、副詞が唯一の標識であるが、しかしその言語標識も構文的にはかなりゆるやかであることは上に見たとおりである。中国語は時間形式に関しては、あたかも時間悠久の長江を見るごとく、一つの語に多くの時間情報が含まれた言語なのである。

日本語の場合は、時制の認知が英語ほど構文的に言語化されていないので、副詞の役割は英語より重い。日本語で一つの語に含まれる時間情報の量は英語と中国語の間くらいに位置すると考えられる。しかし、もともと時間の区切りを示す副詞が時間領域以外でもメタファー的に用いられることが多く、従って用い方によってはある情意性を帯びてくることがあるのが特徴と言える。

中国語のようにテンスの言語規則の緩やかな言語を母国語とする学習者が外国語のテンスを学ぶ時、英語と日本語とどちらが学びやすいであろうか。おそらく、言語形式が自動的に認知領域を決定してくれる英語のような言語の方が、ある意味で学習しやすいのではないだろうか。

6-2. まとめ一言語形式の差異から情意性の差異へ

「もう」は時間関係副詞である。普通の時間副詞が単に「事件時間」を指定するのに対し、時間関係副詞は指定された「事件時間」を照射し相対化する「参照時間」（あるいは、「参照時間」に於いて生じた「参照事態」）を持つ。

文に「参照時間」を与えるのは副詞だけでなく、いわゆる「過去完了」時制もその機能を果たす。例えば、「昨日地震があった時、私は本を読んでいました」という場合、「地震があった時」が「参照時間」である。つまり、「地震があった時」よりも早く「本を読む」という行為が開始されていたことを示している。

では、副詞「もう」の示す「参照時間」とは、いかなるものか。それは対称的に用いられる副詞「まだ」と比較するとよくわかる。「まだ」は、ある「予定された事態」の未実現状態において発話される副詞であるのに対し、「もう」はその「予定された事態」が実現された後に発話される副詞である。それ故、「もう」の「参照時間」とは、「予定された事態」の実現時間を照射し、さらに位置づける時間である。完了した事態の「予定性」、これが普通の完了形と「もう」のつく完了形の表す事態の差である。

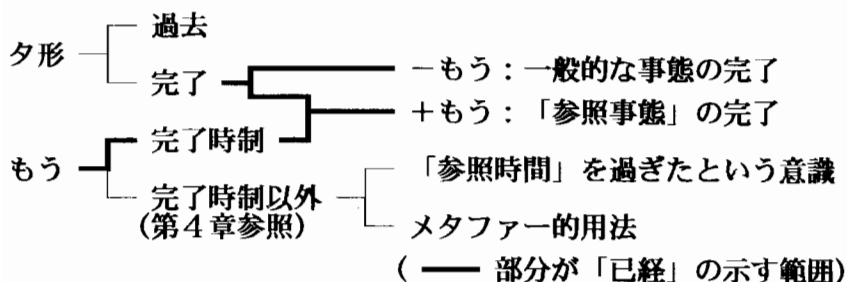
それ故、「もう」が発話される時は必ずある「参照時間」（乃至は「参照事態」）が前提されているのである。また、「もう」のつく事態は、必ず「予定されていた事態」なのである。

ところで、言語形式の上から見れば、日本語の完了形はタ形で表される。完了形を、同じくタ形で表される過去形から区別するにはさまざまな副詞を以てするしかない。「もう」もその副詞の一つである。従って、「もう」のついたタ形の文は完了時制をしめすが、その一方で「もう」のつかない完了形もあるので、「もう」は完了形の標識にはなり得ない。

一方、中国語の動詞には決定的な完了形の標識がない。中国語の「もう」に対応する言葉は「已經」である。この「已經」も「参照時間」を持つ副詞として「もう」のように用いられもするが、また

普通の完了形につくこともできる。つまり、中国語の「已經」は完了形の標識になっているのである。

これを図式化すると、以下のようになる。



「もう」の示す範囲と「已經」の示す範囲は、このように若干ずれている。ここから、中国人学生は「もう」を完了の標識と捉えてしまい、タ形の述語を持つ文に「もう」をつけたがる事情が理解されると思う。

さて、「もう」は「参考時間」を持つ故に、ある情意を呼び起こしやすいという作用を持っている。「もう」が用いられる時は必ずある「参照時間」乃至は「参照事態」が前提されている。例えば、娘が夜遅く帰ってきて恐る恐る母親のご機嫌を伺う時である。

(68) 娘「みんなは・・・」

母「もう寝ちゃったわよっ！」

娘「あ、そう・・・」

などと言う時の「もう」は、相手（娘）の認識の遅れを避難する意味合いがある。この場合の「参照事態」は相手の時間認知（まだみんなが寝ていないような時間である、という認識）であり、その認識時間に比べて「事件時間」（「みんなが寝る」という事態）が早いという情意を含んでいる。もし誤って、「参照事態」がない場合に「もう」が使用されたとしたら、この「もう」は相手の認識の遅れを非難するという情意を伝えかねない。

さらに、「もう」が中国語と違って完了時制以外の述語をも修飾し得るという性質から来るものである。それは、形容詞を修飾する

なら「限度を越えた」ことに対する感慨である。また、完了形を修飾するなら、聞き手の認識の遅れを指摘する情意である。

かくして、「もう」は中国人学生の多用するところとなり、しかも不要に用いられた「もう」が「認識の遅れに対する非難・叱責」という不要の情意を呼び起こすところとなるのである。

これは、日本語の「もう」と中国語の「已經」のカバーする範囲が異なることによる。日本語の「もう」は普通の完了形にはつかないが、中国語の「已經」は普通の完了形もつく。日本語で普通の完了形と「もう」のつく完了形の相違は、ひとえに「事態の予定性」にかかっている。つまり、「もう」は「予定性」のある事態しか修飾できないが、「已經」は「予定性」のない事態まで修飾してしまう。ここが、中国人学生による「もう」の使用の正否の分水嶺である。

このような不要の「もう」を聞いた時、学生をどう指導するか。とりあえず、次の答を準備しておこう。

学生「先生、私はもう交流協会の留学生試験に合格しました。」

教師「それは、おめでとう。でも、あなたの合格は私の予定に入っていなかったんで、紅包は用意してありませんけどね。」

注

(1) 森田 (1988) 、 p. 438~440。

(2) 否定文、および「～ている」の文は状態性とみなされる。またこのことは、前述(1)～(3)の誤用がすべて完了形を伴う文であることと無関係ではない(後述)。

(3) 赤羽 (1991) 、 p. 93。「前提文」とは一般に、命題が真であるための条件を表す文であるが、ここでは「まだ」という言表が可能になるための参考事態のことであろう。

(4) メンタルスペース理論に関しては、『認知科学の発展 Vol. 3

特集メンタル・スペース』参照。

- (5) 森田 (1988) 、 p. 440.
- (6) 森田 (1988) 、 p. 440.
- (7) 森田 (1988) 、 p. 440~441.
- (8) 森田 (1988) 、 p. 439 に、「もう」と「まだ」の派生的用法として「もうすぐ」と「まだまだ」を説明している。
- (9) 「数量領域」と「程度領域」の違いとは、前者が計量可能なものであるのに対し、後者は数値などの客観的基準で表せず、ただ他者との比較などの方法によるしかないものを言う。
- (10) 「まだ食べていません」は事態の未完了を表すものとして、英語の "We have't eaten yet." に相当し、「まだ食べません」は未来の事態の否定を表すものとして、英語の "We still haven't eaten." に相当するであろう (注12)。
- (11) 小学館『英日中辞典』には、"We haven't eaten yet." 及び "We still haven't eaten." という例文を対照して挙げ、「yet は状態の中断を暗示する。・・・still は同一状態の継続を示す」としている (p. 2050) が、「事態の中断の暗示」とは「予定された事態の発生」と対応する表現ではなからうか。
- (12) 日本語のタ形、テイル形によって何種類かのテンス・アスペクトが示されることができ、「もう」「まだ」の使用によってアスペクトの変化が起こる。英語の場合は、アスペクトによる副詞の振り分けが日本語よりも截然としている。
- 動作完了 「もう食べた」 (already)
 - 動作未完了 「まだ食べていない」 (not yet)
 - 動作開始の意志 「もう食べる」 (soon など未来を示す副詞)
 - 非動作状態継続の意志 「まだ食べない」 (still)
 - 動作中止の意志 「もう食べない」 (not any more)
 - 動作継続の意志 「まだ食べる」 (still)
 - 動作の開始完了・継続 「もう食べている」 (already)
 - 動作未開始 「まだ食べていない」 (not yet)

○動作の中止状態の継続「もう食べていない」 (not any more)
動作の継続状態「まだ食べている」 (still)

already は動作あるいは動作開始の完了、not yet は動作あるいは動作開始の未完了状態、not any more は動作の中止を示すもの、still は動作あるいは動作以前の状態の継続を示すもの、と、実に明確である。

(13)ただし、「話者間における時間の認知のずれの調整」の用法はある。「意外の already」と呼ばれる用法がこれにあたるようだ

(41)娘「お父さんは？」

母「寝てるわよ。」

娘「えっ、まだこんな時間なのに、もう寝ちゃったの!」

(41E) Daughter: Where's Dad?'

Mother: He's in bed.

Daughter: What? It's still this early. And he's
already in bed?

(52)もう帰るの? もっとゆっくりしていらっしやいな。

(52E) Are you going back already? You can stay longer.

[参考文献]

赤羽根義章 (1991) 『時間的な様態と認定を表す副詞類』「宇大国語論究2」

石神照雄 (1978) 『時間に関する<程度副詞>「マダ」と「モウ」—— <副成分>設定の一試論 ——』「国語学研究」18号

石神照雄 (1983) 『副詞の原理』渡辺実編「副用語の研究」明治書院 所収

小川芳男・林大他編集 (1991) 「日本語教育事典」大修館書店

茅野直子・秋元美春・真田一司著、名柄迪監修 (1987) 「外国人のための日本語 例文・問題シリーズ1 副詞」荒竹出版

- 工藤浩 (1983) 『程度副詞をめぐる』渡辺実編「副用語の研究」
明治書院 所収
- 寺村秀夫 (1983) 『時間的限定の意味と文法的機能』渡辺実編「副
用語の研究」明治書院 所収
- 久貴・鄭宏・王樹平・張黎明編 (1992) 「日語副詞分類詞典」笛
藤出版
- 日本認知科学会編 (1990) 「認知科学の発展 Vol. 3 特集 メンタ
ルスペース」講談社サイエンティフィック
- 宮島達夫 (1983) 『情態副詞と陳述』渡辺実編「副用語の研究」明
治書院 所収
- 森田良行 (1988) 「基礎日本語 1」角川書店
- 山梨正明 (1997) 「認知文法論」ひつじ書房

- 「簡明中日辞典」(1989) 東方書店
- 「新時代日漢辞典」(1992) 大新書局
- 「日中辞典」(1990) 小学館
- 「英和中辞典」(1980) 小学館
- 「現代英和辞典」(1987) 研究社

*本稿執筆にあたって、元智大学教授の湯廷池先生には、分析にあ
あたって多くの重要な問題点を懇切にご指導いただき、いたく感謝
しております。また、本稿の英語に関する説明は佐藤和美先生及び
竹内香代子先生に、中国語に関する説明は政治大学の蔡瓊芳先生、
輔仁大学の黄瓊慧先生及び東京大学院生の盧承益さんにそれぞれご
指導いただきました。3氏に対し、この場を借りてお礼を申し上げます。

「先生、私はもう合格しました」
—— 台灣學生「もう」的不當用法分析 ——

吉田 妙子

政治大学副教授

[中文摘要]

「私はもう合格しました」這句話為什麼不妥當呢？ 那個不必要的「もう」又為什麼會出現呢？

「もう」是時間關係副詞，它意味前後句子中有表示發生的「事件時間」的同時，必有從別的視點來關照事件的「指示時間」。「まだ」也是時間關係副詞，用於某一「預設事態」還沒有實現時的對話。因此，「もう」句中的「指示時間」是相對於「預設事態的實踐時間」的。另外，「もう」和「まだ」不同，可以修飾完了形的謂語。

「もう」這樣的「事態預設性」除了具有「說話者間時間認知差異的調整」功能外，還有各式隱喻用法，並且因而產生了某種情意。

與日語的「もう」相對應的漢語「已經」是完了形的標籤，但是「もう」則不。學生在完了形謂語的句子裏會使用與「已經」相對應的「もう」，但是這種用法的「もう」會使日本人產生「斥責認識的遲緩」的情意。

[關鍵詞]

時間關係副詞 事態的預定 隱喻 時間領域 數量領域
程度領域 說話者間時間認知差異的調整 時間認知與言語形式
「もう」的情意性 完了時態的標籤